

〈論文〉

記憶・持続・変化(2) ——〈不在〉から〈持続〉へ

Memory, Persistence, Change (2) — From 〈Absence〉 To 〈Persistence〉

松島 恵介

1. 知覚と時間

1-1 時間と持続の発生

持続とは、何か。続いている、ということは一体どのようなことなのであろうか。

はじめに、単なる繋がりとは持続との区別をはっきりさせよう。まず、持続と接続を区別したい。また、連続とも違うものとして持続を考えてみたい。このように、持続を限定するならば、持続とは、時間という要素を含む概念であることが際立ってくるだろう。

単なる繋がりそれ自体を考える為に、隣接ということを考えてみよう。続いている、ということは隣接していることとは異なる。隣接とは、空間的な概念である。物体A1にA2, A3…が繋がっている、それは、持続ではなく、隣接の連続である。また、物体A1, A2, A3…が縦横無尽に自由に連結しているとすれば、どうだろうか。同様、それ自体では、単なる空間の広がりであって、持続ではない。

持続とは、単に繋がっていることでもないし、並んでいることでもない。これらは、空間を表わしている。時間は介入してこない。続いていること＝持続には時間が必要である。では、どのようにすれば、ここに時間が介入してくるのか。

ここに、移動する生物とそれが為す知覚を登場させてみよう。本稿ではとりあえず「見る」ということに限定して議論をすすめたい。

まず、第一に「持続」ではない、とされた、物体A1にA2, A3…が繋がっている例である。これ自体は、A1とA2, A2とA3…の単なる接続であるが、生物が移動しつつ、A1・A2・A3…という繋がりを連続的に目で辿っていくことを考えるとどうだろうか。

知覚主体にとって、A1を見終わった次の瞬間にA2が突然見えるようになることはないだろう。A1に隣接しているA2は徐々に見えてくるはずである。同様に、A1は突然見えなくなることはないだろう。A2が徐々に見えてくるということは、A1が徐々に見えなくなっていくことを示している。この「見えなくなっていく」ことは必ず〈徐々に〉という漸次性を伴うがゆえに、A1が完全に視界から消え去る瞬間を我々は同定することができない。ゆえに、「A1を見ること」と「A2を見ること」という二つの出来事の間には区切りはない。

注意したいのは、空間的には、A1とA2は区切ることが出来るが、移動しつつある生物の知覚にとっては、「A1が見えていること」と「A2が見えていること」とは明瞭に区別することができない、ということだ。生物の移動（これは生物が移動せず目のみを「移動」させても同じ事である）の途上において、二つの視覚体験の区切りが明確にできない、ということは、少し前の瞬間と今現在の瞬間とが区別されることのない、幅を持った「時間」が視覚体験において生成していることを示しているといえよう。ここでは、一瞬ごとのコマ送りのように「見え」が出現し同時に以前の「見え」が消失するのではなく、次第に見えたり見えなくなったりする過程で、「もう見えなくなったこと」と「いま見えていること」とが曖昧にされるのだ。

だから、A1がもはや完全に見えない状態でA2を知覚している、という場合においても、A2は、A1との繋がりにおいて知覚されているはずである。A2は何物とも無関係なものとして——例えば、真空中に浮いているものとして——知覚されるのではない。知覚主体にとって、『A2が見えている』ということには、『見えていない』というかたちでA1が含まれている」。このとき、A1とA2は空間的に隣接しているというより、時間的に持続していると知覚されるだろう。もちろん、このことはA1とA2との関係にとどまらず、A3は、A1からA3に至る持続において、A4は、A1からA4に至る持続において、知覚されているだろう。知覚主体にとって、これらは、「並んでいる」・「つながってる」というよりむしろ、「続いている」のである。

さて、いまひとつの例、物体A1, A2, A3…が縦横無尽に自由に連結している空間の広がりにおいては、どのように時間や持続が登場するのか。これには多言を要しないだろう。これまでと同様、ただ、知覚する生物が縦横無尽に移動しさえすればよい。

空間はいくら広がっていても、それ自体は空間である。しかし、そこに、生物が登場し、知覚行為をなすことで、時間、そして持続が登場する。逆にいえば、時間は、生物の知覚行為のうちにのみ生成するものであって、知覚行為のない生物（そのようなものがあるか

どうかわからないが)には、時間、そして持続がない。

1-2 知覚における時間

前節では、静止した空間において時間と持続が成立するには、運動する生物の知覚行為が必要であることが述べられた。では、逆に、移動(運動)を止めている生物の前を、物体が移動するような場合にはどうであろうか。ここでは、知覚における持続という問題について考えたい。

知覚はどのように持続するのであるか。

まず、我々の知覚において、一瞬という「持続なし」の時間が、どのような意味をもっているかを考えてみよう。

大森荘蔵がくりかえし述べるように、一瞬だけの痛みというものがあるとすれば、それは我々にとってはまったく意味をもたない。同様、目の前が一瞬赤くなったとしてもまったく無意味である。一瞬とは、時間の幅をもたない点時刻であるから、それらは我々の知覚にとっては無意味なのである。痛みや赤みは瞬間よりも長い時間を占めなければならない。視覚についても同様であろう。もちろん我々は「一瞬みえた」という言及を用いることはあるが、この「一瞬」とは時間の幅を持たない瞬間のことをいっているのではない。

いったい、視覚にはどのくらいの時間が必要なのか。

この問いに厳密にこたえることは極めて困難である。そこで次のような問いをたててみよう。

われわれが、遠ざかっていく物体を見るとき、それは、どの瞬間から「見えなくなる」のだろうか。

これは或る程度まで視力の問題である、ということが出来る。視力の悪い人は良い人よりも早期の段階において「見えなくなる」だろう。しかし、兩人とも、「見えなくなる」瞬間を正確に同定することができるのだろうか。

もしロボットであれば、その目(レンズ)の解像度や信号の検出装置の精度によって、明確に「見えなくなった瞬間」を同定することができるだろう。見えなくなるまでの時間や見えなくなる地点も、マシンの性能から単純な計算で割り出すことができる。

翻って我々人間の場合はどうだろうか。我々の視力は、実際、0.7とか1.2といった数値で測定されている。さて、同じ1.2という視力をもつ二人の人間が、遠ざかっていく物体について「いつから見えなくなるか」という判断をしたとしよう。おそらく、その判断は

異なるはずである。これは視力検査の厳密さの問題であろうか。では、視力検査を小数点第10位の精度まであげてみよう。視力1.2398242566を持つ（#）二人がまたもや同実験に挑戦する。しかし残念ながら結果は同じだろう。

これは計測された「視力」の問題ではない。我々にとっては、遠ざかっていく物体は、あくまでも、「徐々に」「かすかに」「ぼんやりと」といった以外での仕方で見えなくなることはなく、「いつから見えなくなったか」という瞬間は特定することはできないのである。

我々の視覚はこのような漸次性から本質的に逃れることは出来ない。これは、視覚ばかりではなく、我々の全ての感覚——聴覚、触覚、味覚、嗅覚、視覚……——に通底する性質であろう。

このことは、生理学的事実であろうか、それとも、心理学的事実であろうか？ おそらく、その両方であろう——知覚とは、生理であり且つ心理である。

これは、〈生物のもつ知覚の性質〉なのである。知覚は漸次性を持つがゆえに、「まだある」ことと「もうない」ことを曖昧にする。先の例でいえば、眼球の解像度では「まだ見えている」状態であっても、我々にとっては「見えなくなっている」こともあるだろう。逆に、眼球の解像度では既に「見えなくなった」としても、我々にとっては「まだ見えている」こともあるかもしれない。後者の例では、もう眼球には「見えていない」のであるから、これはもはや、「知覚」ではなく「記憶」である、といたくなる衝動が生ずるだろうが、これは誤りであろう。その場合、誰にとってその物体が「見えている」のか？ 知覚の主体はあくまでも我々なのであるから、我々が見えていれば、それは知覚されている、というべきだろう。

いずれにしろ、ここまでの議論で重要になるのは、瞬間として同定できるような「現在」という概念が、我々の知覚にとっては、まったく意味をなさない、ということである。我々の知覚は、現在と過去との領域を曖昧にし、我々の知覚は、つねに、以前の「もはやないもの」を含む可能性を孕んでいる。強調すべきは、現在において知覚されているものは、時間的にそれ以前に知覚されたものを——これは現在において〈もうない〉ものであっても——〈もうない〉というかたちで含んでいる、ということだ。

持続という語を用いるならば、我々の知覚は持続的性質を含んでいる。そこに記憶という語を用いるならば、我々の知覚は記憶的な性質を含んでいる。

（#）物理量を測ることと同じような精密さで我々の知覚能力を測る、ということは本質的に不可能である。現在、我々がよく目にする視力検査が小数点第一位（もしくは第二位）までであるのは、

検査製作者の怠慢でもなく、医学の限界でもない。ここで示したような小数点第10位までの精密な視力検査(聴力検査, エトセトラ)は不可能である。詳しい理由については別の機会に述べるが、ここで行なった思考実験と類似の原理から導かれることである。

1-3 「変化」を保証する時間

これまで、「持続」について、知覚者の運動・対象の運動という二つの観点から見た。本節では、対象の質的な「変化」と持続との関係について考えていこう。「AからBへの変化」においては、これまでに扱ったものとは異なる種の持続が成立しているかもしれない。

まずは、変化という事象を成り立たせるものについて考えよう。つまり、「AがBにとって代わられた(Aがいた場所にBがいる)」ではなく、「AがBに『なった』」といえる為の条件である。

すぐ思い付くのは、AとBに何らかの共通点がなくてはならない、という条件だろう。つまり、全てが入れ替わってしまうのではなく、AとBには、「変化しない部分」がなくてはならない、ということである。

このことはしかし、正しくはない。AとBに全く共通点がなくとも、AからBへの移行が〈徐々に〉なされるのであればよいのである。AがBに瞬間的に移行したとすれば、「AがBにとって代わられた(Aがいた場所にBがいる)」とか、あるいは例えば「Aが消え、Bが始まった」と知覚される。それは「Aが成し遂げたBへの変化」ではない。しかし、そこに〈徐々に〉という時間を入れてやれば、どうだろう。Aが、一分間という時間をかけて〈徐々に〉Bに移行したとすれば、それは「AがBに『なった』」と知覚されるだろう。

たとえば、目の前にいたN氏が存在をやめ、それと同時に、ライオンが登場したのであれば、「N氏はいなくなり、ライオンが現れた」と認識されるであろう。しかし、N氏からライオンへという移行が一分間のうちに〈徐々に〉成し遂げられたとすれば、「N氏はライオンに『なった』」と認識されるはずである。いうまでもなく、「なった」とは、同一性を維持しつつ何か別のものになること、すなわち「変化」ということである。

変化とは、「Aが存在をやめ、Bが現れる」という二つの主語からなる二つの文ではなく、「AがBになる」こと、つまり、Aという主語がBという目的語を携える一文で完結する構造になっており、ここでは、Aが全く消え去って「ない」状態になったとしても、Bという存在にはAという存在が「ない」かたちで挿入されているのである。

AからBへの「変化」とは、AからBへの「持続」を成し遂げているのである。また、ここにおいても、持続や変化を支えているのは、〈徐々に〉という時間であることがわかる。

N氏とライオンが別人になるか、同一人物になるかは、N氏とライオンとの類似による

ものでは決してない。それを決定するのは、ただただ、〈徐々に〉という「時間」なのである。

では、〈徐々に〉という時間を決定するものは、いったいなにか。基準があるとすれば、どこにあるのか。

N氏とライオンのあいだにある〈徐々に〉ということに費やされる時間は、なにも、一分間でなくともよい。五秒でも、もしくは、五十年間でもよいだろう。ただし、千分の一秒だったり、一万年であったりしてはならない。これは何を意味するか。

この時間の範囲を決定するのは、我々の知覚と対象の変化スピードとの関係性である。すなわち、我々の知覚器官の精度（分解能）や記憶能力、そして、物質としての身体がどの程度の時間、朽ち果てないか…etc.ということと、事象の変化スピードとの関係である。もし我々の知覚器官の分解能がすぐれており、千分の一秒という時間経過を、味わう(?)ことが出来るならば、千分の一秒の間に起こる出来事の連続的な移行を「変化」として認識できるであろう。〈徐々に〉を決定する時間の範囲の規定は確かにあるが、それは決して客観的指標ではなく、またそれは絶対的なものではなく、我々と対象との相対的な関係によって決まるのである。〈徐々に〉を成り立たしめるのは、対象の側の変化のスピードそのものではない。

よって、たとえば老人と子どもとでは、同一現象をみても、それに対する知覚は異なることが度々あるだろう。子どもが「物体Aが物体Bに変化した」と知覚したとしても、老人は「物体Aがあったところに物体Bが出現した」と知覚するかもしれない。

また、これは、あくまでも身体と対象との関係性、すなわち「比」の問題であるから、身体と対象の間に、何らかの外部機器を介在させることによって、知覚を変更することもできる。知覚の分解能を上げるために、外部機器を利用するのである。たとえば我々が最新の高性能ビデオという外部機器を手に入れ、千分の一秒を5秒ていどに引き伸ばしてスローモーションで見れば、同一現象に対する知覚は以前と変わったものになるだろう。このとき、我々にとって、新しい時間が構成されたといってもよい。

2. 過去の発生

ここまでで、おもに知覚に関する、「ない」ということ・持続・そして〈徐々に〉という漸次性についての輪郭が少しずつ露わになってきた。以上のことを念頭に置きつつ、記憶と時間、そして過去という問題について触れてみたい。

2-1 記憶の保存？

2-1-1 「もうない」という存在

ロボットには記憶装置があり、そこには、様々な記録が残っている。我々の脳もある種の記憶装置であり、そこには、また、何らかのものが残っていることだろう。両者において、過去という時間はどのように存在しているか。

記憶装置を持ち、外からの情報を累積させていく「ロボットX」がいる、としよう。一般に、我々が想像し易いロボットである。

さて、ロボットXにおいては記憶が保存されている場所が明確にある。それが抽象的な空間であろうがなかろうが、それは、貯蔵庫と呼ばれるような場所を何らかの状態で占めていることに間違いはない。さて、先の例を思い起そう。その場所にはさまざまな記憶が貯蔵されているであろうが、それらはいくら集まっても、時間や持続は発生しない。

もちろん、各々の記憶には過去を表象する「日付」が添付されてはいるだろう。しかし、それは、過去を表わす記号に過ぎず、過去という時間そのものではない。日付それ自体は、単に数直線なのであって、それが直接に時間を生み出すことはない。貯蔵されている情報を、時間順に並べたとしても、そこには時間はない。先の例、A1, A2, A3…と縦列に繋いでいったところにも時間はそれ自体では生起しないことを思い起したい。

では、我々の記憶についてはどうか。

我々の記憶は、ロボットXと同じように保存はされている。ただし、異なるのは、その記憶が主体にとって、常に、「もうないもの」として現れることである。ロボットXにとっての記憶は、決してそのように現象しない。それは、データというかたちで貯蔵庫に「あるもの」に過ぎない。しかし、我々にとっては、記憶は単なるデータとしてあるのではなく、過去という「もうないもの」なのである。

このようにみると、常に「ある」かたちで保存されているロボットXの記憶は、記憶というより〈記録〉とでも呼んだ方がよいだろう。繰り返すが、そこには「日付」という記号が副次的に添えられているだけであって、「もうない」という過去性は微塵も伴わない。ロボットXの内部に保管されているそれは、外部の世界が何らかの手続き（または加工）を経て単に体内に「映し込まれた」ものに過ぎない。つまり、ロボットXの身体を境として、外部に「ある」ものが、身体の内部に「ある」ものへと、「ある」場所を変えたに過ぎないのである。

さて、知覚において、「もうないこと」と「いまあること」との関係が、持続という現象を成り立たせていたことは先にみたとおりである。知覚が終了し、対象が完全に目の前から消え去り、その後が始まる記憶という新しい領域においても、「もうないこと」は受け継

がれているといえるだろう。そして、その故に、我々において、〈過去—現在〉という、より大きな持続が成立するのである。ロボットにおける記憶はあくまでも記録の集合なのであって、「もうない」過去として「いまある」現在との持続を果たしているものではない。持続とは、書かれたもの・表象されたものの蓄積ではないのである。

我々の記憶にとって重要なのは、「もうないもの」としてあること、そして、過去から現在へと持続していることなのである。

恐らくこれは「自己」の持続という問題に関連してくるだろう。我々の記憶にとって重要なのは、「保存されている」ことなのではなく、「続いている」ことなのである。

さて、では、過去という次元の中では、どのような「持続」や「時間」があるのだろうか。「もうない」過去は複数あるはずだ。その間の関係はどうなっているのか。これについて、少しだけ考えてみたい。

2-1-2 「ないもの」のなくなりかた

このことについて考えるには、忘却について考えるのがよいだろう。

我々は、忘却する。「もうないもの」である記憶は、最終的には、それ自体、ほんとうに「なくなってしまう」、すなわち完全に忘却されてしまうものが多い。しかし、実は、その無くなりかたは、突然の消滅ではない。それは、完全に消滅するそのまえに、「徐々に」なくなっていく。順にみていこう。

まず、我々は、知覚の後（もしくは知覚とほぼ同時）に、「ありありとある」という状態を経験する。目をつぶって見ればよく分かるように直前のことは「ありありと」しているだろう。これが最初の段階である。次いで、それは「もうないもの」として経験される。たとえば、つい先程のことを思い浮かべているような状態である。しかし、その「もうないもの」は、間もなく、いったん忘却され、ときどき思い出されることになるだろう。思い出されるその都度において「もうないもの」として経験されるのである。これが第一段階の忘却であり、「忘れてたけど思い出した」というかたちをとる。そして、次の段階では、完全な忘却が起きることになる。つまり、「完全に忘れた」状態である。ここにおいて、「もうない」という過去は、「もうない」ことすら意識されず、完全に「無い」状態へと変化することになる。

順に図式化してみよう。不在の対象が「ありありとある」→「もうない」ことが常にある→「もうない」ことは想起の都度にある（「もうない」ことは普段忘却されている）→「もうない」ことすら「ない」（忘却されていることすら忘却される）

このように、最初の段階である、不在の対象が「ありありとある」ことから「完全な消失」へ、「ない」ことは〈徐々に〉無へ向かって進行していくのである。これを別の表現でいえば、「ありありとある」という実在性から「ないものとしてある」という不在性へ、そして、不在である対象を「通常忘れていたが思い出すことは出来る」という、いわば、不在の潜在性へ、そして、完全なる「無」へ…と表現することもできるだろう。

我々にとって、知覚されたものとは、次いで記憶され、そこにおいてその「ない」次元を徐々に深めていくのだ。我々人間にとって「もうない」ということは、それ自体で変化を停止した「無」なのではない。記憶の当初にあった「もうない」という在り方における「ない」は、時間経過とともに、それは「ない」なりに、その「なさ」を深めていくのである。

知覚において、「もうないこと」、そして「徐々になくなっていくこと」が、持続ということ成立させていた様相は先にみたとおりである。知覚が終了し、対象が完全に目の前から消え去り、記憶という新しい領域へ移っていったとしても、「もうないこと」・「徐々になくなっていくこと」は進行していく。そしてその故に、我々の記憶のなかでも、持続が成立し、「過去」がそれ自体で時間や持続をもちうるのである。(もちろん、過去という時間が一元的な持続であるということではない。様々なかたちで複数の持続が成立しているだろう。これについては別の機会に述べたい。)

2-2 持続と自己

2-2-1 過去形の主語は誰か

しかし、そうはいつでも、万が一次のような反論が生じるかもしれない。ロボットXの体内に過去形での記録がデータとして保存されているのであれば——例えば「ワタシはそばをタベタ」という言語のかたちで——それは、過去であることは「明示されている」のではないかと。

では、以下で、この「ワタシは～シタ」といったような「過去形でのデータ」がそれ自体完結したものとして保存されている、という発想がいかになンセンスなものであるかを示そう。

「ワタシはそばをタベタ」という記録が、ロボットの体内に貯蔵されたデータである、という点から考えてみたい。

まず、貯蔵庫に保存してある「ワタシはそばをタベタ」というデータにおけるワタシと

は誰の事であるのか。

即座に、それは間違いなくそのデータを所持する主体だ、ということが果たしてできるであろうか。

さて、「ワタシはそばをタベタ」という表記は既に表記されているものであるから、固定されていると考えることができよう。であれば、この「ワタシ」も、固定された表記であり、一切変化することはない。その一方で、それを貯蔵庫から呼び出そうとしている「私」は、刻々と変化しつつある動的な存在である。私は、そばを食べた後、様々な経験をし、成長を遂げ、変化している。このように考えると、固定されたまま保存されている「ワタシ」は主体である「私」とはイコールではないことになる。「ワタシ」とは誰なのか？

そもそも、この「ワタシはそばをタベタ」というデータは、どの時点で書き込まれたものであるのか。またもや即座に、それは、そばを食べた時点である、という返答があるかもしれない。しかし、その時点では、「そばを[・]タ[・]ベ[・]テ[・]イル」のであって「そばを[・]タ[・]ベ[・]タ」ではない。ロボットはどの時点から、「そばをタベタ」というデータに変更することができたのだろうか——どのような方法で、どのような基準で？

他にも、さまざまな問題がつきまとう。「ワタシはそばをタベタ」は、これ自体でひとつの完結したデータであるから、コピーすることが可能である。コピーされたデータを、他のロボットにコピーすることも可能であるということになる。

では、ロボットXから、ロボットY（ロボットXと同じ構造を持つものとする）にこのデータをコピーしてみよう。すると「ワタシはそばをタベタ」というデータがロボットYの身体の内側に生まれることになる。さて、このとき、そばを食べた「ワタシ」とは、誰になるのか。

まず、そばを食べたのはXであり、Xの「ワタシはそばをタベタ」というデータがそのまま、Yにコピーされたのだから、「ワタシはそばをタベタ」の「ワタシ」はXである、と考えることができるだろうか。しかし、このデータはYの体内にあるのだから、Yの体内にある「ワタシ」がXである、というのは、おかしい。

では、Yの体内にコピーされた、そばを食べた「ワタシ」が、Yである、としよう。しかし、それは、いつから、そうなったのか。Yの体内にコピーされた瞬間に、ワタシがYを指示するようになったのか。だとすれば、「ワタシはそばをタベタ」が一つの完結したデータである、とする当初の規定がおかしいことになってしまう。

「ワタシはそばをタベタ」という完結したデータが貯蔵庫に保存されているのでないとするれば、人間である我々において「ワタシはそばをタベタ」という現象は、いったい、いつ、

どのようにして成立するのであろうか。また、そのとき、「ワタシ」とは誰を指しているのだろうか。

我々は「ワタシはそばをタベタ」と発話することができる。このことについて考えよう。

発話された「ワタシはそばをタベタ」における「ワタシ」とは、誰の事か。まず、ワタシとは、当時そばを食べた本人であるワタシである、ということが出来よう。しかし、それだけではない。もうひとつ、「ワタシはそばをタベタ」は発話されたものであるから、「ワタシ」とは、そばを食べていない現在のワタシである、ということが出来る。すなわち、このワタシとは、かつてある時点でそばを食べるという経験をしたワタシであり、かつまた、現在そばを食べていないワタシ、という二つの「ワタシ」を同時に含んでいることになる。

過去形の主語となるワタシとは、「たしかにこの私ではあるが、厳密にいえばいま現在の私ではない」という1.5人称的な私(松島, 1996)であるがゆえに、このように、二つのワタシをまたぐかたちでしか成立できないのである。「ワタシはそばをタベタ」という過去形の表記は、現在においてそのように発話することによって、はじめて成立するものなのである。すなわち、「ワタシはそばをタベタ」こと自体は、決して保存することができない。それは、表記されるべきものではなく、発話されるものなのである。過去形における主語は、発話によってしか成立しないのである。

そして、この発話こそ、想起と呼ばれるものである。想起とは、現在と過去とに関わる行為であるということが出来るだろう。否、これまでの議論からいえば、むしろ、過去から現在までのワタシに関する持続を生成する行為である、といったほうがよいだろう。想起をしなければ、現在と過去は架橋されないのであるから。ちなみに、いうまでもなく、ロボットは想起することが不可能である。

2-2-2 記憶の「他者性」という問題

少しずつ厄介な問題へと入ってきてしまった。過去から現在へと続いている「私」だとか「自己」といった問題である。しかし本稿ではこの問題を真正面から捉えるつもりはない。あくまでも記憶という関心から派生した二義的な問題として扱う。

さて、記憶にとって厄介なのは、先に述べたような、二重の時間を同時に表出していることである。たとえば、先の例では、「そばを食べた過去」と「食っていない現在」である。

この二つの時間はまた、想起において二つの感情を喚起させるだろう。そばを食べたのが他でもないこの私自身であるということから、私は何かしらリアリティを感じる事が出来るだろうし、私が現在そばを食べていないということから、私は懐かしさのようなも

の（これはもっとよい表現があるかもしれないが）を感じることができるだろう。リアリティと懐かしさのようなもの、この相反する感情を同時に導くのが想起という活動である。

しかし、相反するのがこのレベルで起こるのならばまだよい。次のような場合は、どうであろう。「私はかつてバラを美しいと思った。が、今は美しいとは思っていない」。

これは、「私はかつてそばを食べた。が、今は食べていない」という想起とは本質的に異なる。そばを今食べていない私は、かつてそばを食べたことを事実として思い出せるだろう。だが、バラを今美しくないと思っている私は、かつてバラを美しいと思ったことを確かな事実として思い出す事ができるのであろうか。そして、先述したような、リアリティか、あるいは、懐かしさのようなもの、そのどちらかでも主体に喚起させることができるのだろうか。

想起主体である私自身は、いま現在、間違いなく、バラを美しいとは思っていないのである。そうした私が、「バラを美しいと思っていた過去の私」をありありと思い出すことは原理的に不可能なことではないか。万が一、バラを「ああ美しい」と思う私がありありと再現されたのであれば、それはもはや、現在において「バラを美しいとは思っていない」のではなく、現在「バラを美しい」と思ってしまっている、ということになりはしないだろうか。

では「私はかつてバラを美しいと思った。が、今は美しいとは思っていない」という言及は、嘘を含んでいるといえるのだろうか。

実は「私はかつてバラを美しいと思った。が、今は美しいとは思っていない」という言及の前半部は、厳密な意味での想起ではない。

それでは、いかにしてこの言及が可能になるのか。それは、まちがいなく——たとえば、バラの本を沢山集めていた、とか、プレゼントはいつもバラの花束を希望していた、とか、学校の帰りにはよく花屋に行ってバラを眺めていた、といったような——周辺事象の想起から導かれたことであろう。すなわち、「私はかつてバラを美しいと思った。が、今は美しいとは思っていない」という言及は、周辺事象からの「推論」によって達成されたものである。これは、想起ではない。さしあたっては、〈過去形による推論〉と命名しておこう。

ロボットに関しては、こうした事態は起こり得ないだろう。彼らは、わざわざ「過去を志向する表現をしつつも、実際は、当該の過去事象を直接に志向しない」などという手の込んだことを行なわないだろう。もしそのような行動が起こったとすれば、それは他者を「騙す」という、別のプログラムが発動されたはずである。

さて、今現在バラを美しいと思っていない者が、かつてバラを美しいと思ったことについて言及するとき、先に述べたようなリアリティは生まれまいだろう。このときの「過去の私」は、「現在の私」からみれば、〈他者〉であるに違いない。しかし、いったい彼以外の誰が、それについて言及することができるというのか。

この困難は、やはり、「過去の私」が、「たしかに私ではあるが、現在の私ではない」、つまり、「私でありつつ、私ではない」、という両義性/二重性を孕んでいることに起因するものだろう。「私」とは、「もうないこと」、「いまあること」の両者の当事者であるがゆえに、「もうないこと」と「いまある」ことの間で、分裂しつつ、持続する存在である。

引用文献

松島恵介『『しない私』と『した私』—断片的自己を巡るふたつ（あるいはひとつ）の時間について』佐々木正人編『想起のフィールド』新曜社 1996, pp.1-30.